

〈修士論文要旨〉

畿内における古墳時代中期の小規模古墳

西 本 和 哉*

古墳時代中期におけるヤマト王権の地域支配については、前方後円墳の分布状況から定義されることが多い。ただし、大型の古墳にもとづく理解は地域首長の造墓活動という側面であり、地域勢力の内部構造を考慮したものではない。よって首長以下一般成員に対する社会的位置づけはきわめて不明瞭であるのが現状である。これを明らかにするには墓域のみならず集落を含めた活動領域を総合的に検討する必要があるが、仮に古墳に限定して追及するのであれば少なくとも中・小規模の古墳を含めた地域内での階層差の抽出が不可欠と考えられる。

これまでに提示されている古墳時代中期の小規模古墳に関する研究は、群集形態をとる小規模古墳の性格をどのように理解するかを目的とした研究が多い。一方で、同一地域内に築造される小規模古墳間の有機的な関係についての論考は散見されるにとどまる。小規模古墳の性格は群集墳などの構造分析に加えて、大・中規模の古墳を含めた一定地域内での位置づけを行い、さらに中央との関係を論及することで、より具体的な被葬者像を見出すことができると考える。このような立場から本稿では、まず面的な調査のおこなわれている群集墳で群構造の復元をおこない小規模古墳の築造パターンを検討する。次に一定地域の造墓活動の中で小規模古墳の位置づけを円筒埴輪の製作技術から検討し、中心的な古墳が築造される古市古墳群の円筒埴輪と比較することでヤマト王権による地域支配の方法を明らかにすることを目的とした。

まず行ったのが、畿内に所在する小規模古墳の構成に関する検討である。畿内に分布する古墳時代中期の小規模古墳は多くの場合、群集墳を形成していることは既に指摘されてきた。一方で、小規模古墳がどのような築造過程を経て群集墳を形成するのかを論じた研究は少ない。小規模古墳の性格を見出すには、まず群集墳内での構造分析を踏まえた上で、群集墳間の比較をおこなうべきであると考えた。このような視点から本稿では調査が広範囲に及んでいる総持寺古墳群、住吉宮町遺跡、池田遺跡を分析の対象とし、先行研究と比較する方法をとった。その結果、以下のような結論を得ることができた。

- ① 群集墳の規模や築造される古墳の数はさまざまである。
- ② 群集墳は、明確な盟主墳をもつ古墳群と、盟主墳が不在である古墳群に大別できる。
- ③ 群集墳の形成期間には長短があり、築造のピークも異なる。
- ④ 小規模規模の近接形態は世代をこえて古墳を築く集団が、小単位の墓域である「小墓域」を設定することで設立したものであり、群集墳はその集合体にほかならない。
- ⑤ 埴輪の有無が古墳群内で階層差を表示する一手段であることが考えられた。
- ⑥ 群集形態をとる小規模古墳内にも階層差がみうけられる。

平成18年度 *文学研究科文化財史科学専攻

⑦ 古墳群内で検出される円筒埴輪の製作規格は、同地域内の大型古墳やその陪冢に供給されたものに比べ小規模である。

つまり、古墳時代中期に築造された墳丘長10m内外の小規模古墳を「等質的な性格の被葬者による墓制」とする見解は成り立ちがたいと考える。小規模古墳による群集形態には墳形差では理解できない階層表示があり、その一つとして埴輪が重要な要素となりえたことを示していた。

つづいて行ったのは、一定地域における造墓活動の中で小規模古墳の位置づけを行う作業である。本稿では比較的良好な資料が得られている生駒山地西麓地域を対象地域とした。分析方法は、まず各古墳から出土する土器型式の先後関係から生駒山地西麓地域の造墓活動の変遷を明らかにし、時間軸のなかで小規模古墳の築造状況を把握した。そして、個々の小規模古墳の性格を理解するために、遺跡間の円筒埴輪を比較する作業をおこなった。埴輪を研究材料とした理由は、その製作が造墓活動の一環として行われることが予想され、被葬者の属する集団あるいは共同体の特徴が反映されると考えたからである。小規模古墳に供給される埴輪がどのように展開するのかを明らかにすることは、手工業製品の視点から当該地域の小規模古墳の性格を検討することになる。このような過程を経て最終的に生駒山地西麓地域の円筒埴輪と古市古墳群の円筒埴輪を比較することで、小規模古墳被葬者の社会的位置づけをめざした。

検討の結果、古墳時代中期の生駒山地西麓地域では、周辺地域と同じように中期初頭、中期後葉に造墓活動の面期が見出せるが古墳の構成が大きく異なり、中期前葉から中期中葉にかけて地域を代表する首長墓系譜が見出せず、当該地域全域で小規模古墳による均質的な造墓活動が行われることが最大の特徴であることがわかった。このような結果から、筆者は生駒山地西麓地域がヤマト政権を構成する有力豪族が介入しない、ヤマト王権の直轄的な領域に相当と考えるに至った。

また、円筒埴輪の製作技法からは、生駒山地西麓地域の埴輪生産に古市古墳群で埴輪生産に携わった人物が含まれていたことが指摘され、生駒山地西麓地域の小規模古墳の埴輪製作は、ヤマト王権が主導する手工業生産のなかでとり行われていたと考えられた。このような結果は、筆者が生駒山地西麓地域はヤマト王権の直轄的な領域にほかならないとする指摘を補強するものであった。

以上が本稿における主な研究内容である。まとめるに、畿内に築造される小規模古墳の被葬者の性格は均質的なものではなく、築造場所や被葬者が属した集団によって、社会的な位置づけが異なることがわかった。畿内でも大和、摂津といった地域では、在地の有力豪族を介した階層性の中で小規模古墳が築造されるのに対し、河内地域ではヤマト王権による直接的な支配体制がみられた。このことからヤマト王権の直轄的支配がいきわたる地域を見出すことができた。古墳時代中期のヤマト王権は有力豪族を介した地域支配をおこないつつ、彼らの生産力に政権の基盤をおいていただけでなく、王権の中核地域に馬飼、鉄器工人に代表されるような技能者を定住させることで自身の生産力の向上をはかっていたことが考えられる。

本稿では、当初の目的をヤマト政権による地域支配を理解することに置いてきたが、示唆的なケーススタディを示すことができたと考えている。